『聞く人を生かす声』ヨハネ5:19-29

5:19 さて、イエスは彼らに答えて言われた、「よくよくあなたがたに言っておく。子は父のなさることを見てする以外に、自分からは何事もすることができない。父のなさることであればすべて、子もそのとおりにするのである。
5:20 なぜなら、父は子を愛して、みずからなさることは、すべて子にお示しになるからである。そして、それよりもなお大きなわざを、お示しになるであろう。あなたがたが、それによって不思議に思うためである。
5:21 すなわち、父が死人を起して命をお与えになるように、子もまた、そのこころにかなう人々に命を与えるであろう。
5:22 父はだれをもさばかない。さばきのことはすべて、子にゆだねられたからである。
5:23 それは、すべての人が父を敬うと同様に、子を敬うためである。子を敬わない者は、子をつかわされた父をも敬わない。
5:24 よくよくあなたがたに言っておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをつかわされたかたを信じる者は、永遠の命を受け、またさばかれることがなく、死から命に移っているのである。
5:25 よくよくあなたがたに言っておく。死んだ人たちが、神の子の声を聞く時が来る。今すでにきている。そして聞く人は生きるであろう。
5:26 それは、父がご自分のうちに生命をお持ちになっていると同様に、子にもまた、自分のうちに生命を持つことをお許しになったからである。
5:27 そして子は人の子であるから、子にさばきを行う権威をお与えになった。
5:28 このことを驚くには及ばない。墓の中にいる者たちがみな神の子の声を聞き、
5:29 善をおこなった人々は、生命を受けるためによみがえり、悪をおこなった人々は、さばきを受けるためによみがえって、それぞれ出てくる時が来るであろう。

●序論
先日の祈祷会で、AGバイブルアカデミーのサンプル映像をご覧いただく前後で、わたしが何度かお話したことがあります。
それは、すでにわかっていることを学ぶ時にも、そして新しい学びの時にも、「アーメン」と言葉にしながら学ぶことの大切さです。
アーメンと謙虚にされる学びを通して、わたしたちは神さまの霊的取り扱いを経験できる。そのことを知っていただきたいのです。

さて今日の聖書箇所で、実は「アーメン、アーメン」と強くイエスさまが語りだす言葉を3か所見ることができます。
　「よくよくあなたがたに言っておく。…」と。
つまり今から語ることは、特に気をつけてしっかりと耳を傾けてもらいたい真実な言葉なのだと、イエスさまは語りだしているのです。
だからこそ、わたしたちがその言葉を聞いての応答は、アーメンでありたいと願うのです

●本論
Ⅰ．それは神の子の声です
先週読んだユダヤ人たちが腹を立てたことの最も大きな理由。
:18　「…それは、イエスが安息日を破られたばかりではなく、神を自分の父と呼んで、自分を神と等しいものとされからである」
それはこの節の冒頭にあるように「このためにユダヤ人たちは、ますますイエスを殺そうと計るようになった」という殺意につながっていたのです。
その思いを知ってイエスさまは、どうお答えになったでしょうか。
はっきり、みずからを「神の子として」自分のなさっていることを説明されたのです。

5:19 さて、イエスは彼らに答えて言われた、「よくよくあなたがたに言っておく。子は父のなさることを見てする以外に、自分からは何事もすることができない。父のなさることであればすべて、子もそのとおりにするのである。
ここでイエスさまは「アーメン、アーメン」とはっきり語りました。
さらに、父なる神さま由来の理由であることを強調します。
5:20 なぜなら、父は子を愛して、みずからなさることは、すべて子にお示しになるからである。そして、それよりもなお大きなわざを、お示しになるであろう。あなたがたが、それによって不思議に思う(驚く）ためである。

ここで先週イエスさまが言われた言葉の意味が分かります。
:17　…「わたしの父は今に至るまで働いておられる。わたしも働くのである」。
ああ、そうか。そう言われたのは、子であるイエスさまは、父なる神さまとの愛の関係の中でその思いを受けてなさっていた事だ…とわかるのです。
これは、安息日にさまざまな規定を厳守できるかどうかに注目していたユダヤ人たちにとって、「アーメン」と言えない事でした。
まさに「あなたがたが、それによって不思議に思う（驚く）ためである」と言われた通りとなっています。
わたしたちは文字面ではなく、語っておられる”神さまご自身”に目を向けることが大切です。のちのパウロはこんな風に言っています。
Ⅱコリント3:14 (LB)…今でも、聖書が朗読される時、ユダヤ人の思いには、厚い覆いがかかっているように思えます。というのは、聖書のほんとうの意味を知ることも、理解することもできないからです。この覆いは、キリストを信じて初めて取り除かれるのです。
イエスをキリストと信じて、そうしてはじめて「アーメン」だとわかる祝福の世界をイエスさまはお示しになっているのです。

Ⅱ．それは命を与える声です
5:21 すなわち、父が死人を起して命をお与えになるように、子もまた、そのこころにかなう人々に命を与えるであろう。
イエスさまが、人々に命を与えることが語られていますが、ここにも父なる神さまとのつながりが示されています。

前にもどりますが、イエスさまはご自身が成していることについて…

「…子は父のなさることを見てする以外に、自分からは何事もすることができない。父のなさることであればすべて、子もそのとおりにするのである。」(:19)と、語りました。

これは、イエスさまの能力を語っているのでもないし、イエスさまが謙遜にふるまっている…ということを語っているのでもありません。

ここで、イエスさまは、ご自分が語る言葉も、成しているわざも”すべて父なる神さまと一致している”ということを示しているのです。

ですからさきほど21節で聞いた「子も、また、そのこころにかなう人々に命を与えるであろう」という表現も、すべて父なる神さまと一致するのです。

そうして、この後続く言葉が理解できます。

5:22 父はだれをもさばかない。さばきのことはすべて、子にゆだねられたからである。

5:23 それは、すべての人が父を敬うと同様に、子を敬うためである。子を敬わない者は、子をつかわされた父をも敬わない。

一致しているからこそ、すべて、つまり命を与えることも裁く事さえも、御子イエスさまにゆだねられても、それは父なる神のみ心に合致するのです。

これこそが「三位一体の神さま」のありさまです。

ですからわたしたちがイエスさまを心から信じ、信頼し、この方に耳を傾けることは、すなわち父なる神さまに耳を傾け、従うことと一致するのです。

ですから、イエスさまを拒むこと、敬わないでいること、また殺そうとすること、それらはすなわち、父なる神さまを拒絶することであった…という。その点においてユダヤ人たちは大きな過ちを冒した、ということです。

ここであらためて、命を受け取る人はだれだろうか？

5:24 よくよくあなたがたに言っておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをつかわされたかたを信じる者は、永遠の命を受け、またさばかれることがなく、死から命に移っているのである。

イエスさまを通して、父なる神を信頼する人です。これこそが、神のみ心に一致します。

ヨハネ3:16　(父なる)神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。

子を見て信じる者は、父なる神の、この愛を受け取り、永遠の命を得ることができると言われているのです。

Ⅲ．それは聞く人を生かす声です

5:25 よくよくあなたがたに言っておく。死んだ人たちが、神の子の声を聞く時が来る。今すでにきている。そして聞く人は生きるであろう。

「死んだ人たち」とは、この世の日常の中で、神さまを知らず、また背を向けて生きている人たちのことを指します。

でもその人がその人生のどこかで、このイエスさまの声を聞いて耳を傾け、そして受け入れ信じて行った時、その人は生きるようになる！とはっきりと告げられているのです。　それは、どんな人でもです。

すぐに思いつくのは、あの元やくざの総長であった兼光先生も…

:24 よくよくあなたがたに言っておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをつかわされたかたを信じる者は、永遠の命を受け、またさばかれることがなく、死から命に移っているのである。

この声の主は、命をお持ちのお方です。

:26 それは、父がご自分のうちに生命をお持ちになっていると同様に、子にもまた、自分のうちに生命を持つことをお許しになったからである。

今、この声を聞くチャンスと時間を、わたしたちのまだ救われていない家族のために、まだこの声を聞いたことのない友人たちのためそなえてくださっています。そしてその人たちのために、わたしたちをこの世においてくださっているのです。

これこそ福音です。イエスさまがあの十字架で命をも捨てて、わたしたちにその声を聞き、信じるだけで救われるようにと与えてくださったものです。

◎最後に

細川ガラシャという戦国時代に数奇な人生を歩み、その中でクリスチャンとなった方をお聞きになった方もおられるでしょう。

彼女が生きた時代は、キリスト教の信仰を持つには困難な迫害の時代でしたそれでも彼女は洗礼を望みました。そうした中で、宣教師は侍女の一人を用いて、その侍女を通して洗礼を受けることができたということです。

最も困難な時代の困難な立場で、その人生を歩んだこの人の生涯は、今日も語り継がれるキリスト信仰の証となっています。

私はなぜこの方のことを今お話しているのか。

この人は最も困難な時代の中で、イエスさまの声を聞いた時、信じることで、命に移された人であったと知るからです。

まさにイエスさまの言われた通りでです。

:24 よくよくあなたがたに言っておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをつかわされたかたを信じる者は、永遠の命を受け、またさばかれることがなく、死から命に移っているのである。

心から「アーメン」ということができる、これこそ私たちの信仰の幸いです。